

竜舌蘭

寺田寅彦

青空文庫

一日じめじめと、人の心を腐らせた霧雨もやんだようで、静かな宵闇よいやみの重く湿った空に、どこかの汽笛が長い波線を引く。さつきまで「青葉茂れる桜井さくらいの」と繰り返していた隣のオルガンがやむと、まもなく門の鈴が鳴って軒の葉桜のしずくが風のないのにばらばらと落ちる。「初雷様だ、あすはお天気だよ」と勝手のほうではあさんがひとり言を言う。地の底空の果てから聞こえて来るような重々しい響きが腹にこたえて、昼間読んだ悲惨な小説や、隣の「青葉しげれる桜井の」やらが、今さらに胸をかき乱す。こんな時にはいつもするように、机の上にひじを突いて、頭をおさえて、何もない壁を見つめて、あつた昔、ない先の夢幻の

影を追う。なんだか思い出そうとしても、思い出せぬ事があつてうつとりしていると、雷の音が今度はやや近く聞こえて、ふつと思ひ出すと共に、ありあり目の前に浮かんだのは、雨にぬれた竜りゅう舌げつ蘭らんの鉢はちである。

ここの河野よしのの義よしさんが生まれた年だから、もうかれこれ十四五年の昔

になる。自分もまだやつと十か十三ぐらいであつたらう。きたる

幾日よしお義雄よしおの初節句よしおの祝いわいをしますから皆さんおいでくださるよう

にとチョンまげ鬻かねさくじいの兼作まげ爺かねさくじいが案内かねさくじいに来て、その時まげにもらつた紅白まげの

餅もちがまげ大きもちかつた事も覚えていまげる。いよいよその日となつて、母上まげ

と自分と二人で、車まげで出かけた。おりからの雨で車の中は窮屈まげで

あつた。自分の住ままげっている町から一里半余、石ころの田舎道いなかみち

をゆられながらやつとねえさんの宅へ着いた。門の小流れの菖蒲も雨にしおれている。もうおおぜい客が来ていて母上は一人一人にねんごろに一別以来の辞儀をせられる。自分はその後ろに小さくなつて手持ちぶさたでいると、おりよくここの俊ちゃんが出て来て、待ちかねていたというふうで自分を引つ張つてお池の鯉を見に行つた。ねえさん所には池があつていと子供心にうらやましく思っていた。池はちよつとした中庭にいつぱいになつていて、門の小川の水が表から床下をくぐつてこの池へ通い裏田んぼへぬけるようにしてある。大きな鯉、緋鯉がたくさん飼つてあつて、このごろの五月雨に増した濁り水に、おとなしく泳いでいると思うとおりおりすさまじい音を立ててはね上がる。池のまわ

りは岩組みになつて、やせた巻まきがしわ柏、櫻欄竹しゅろちくなどが少しあるばかり、そしてすみの平たい岩の上に大きな竜舌蘭りゅうぜつらんの鉢が乗っている。ねえさんがこの家へ興こしい入れになつた時、始めてこの鉢はちを見て珍しい草だと思つたが、今でも故郷の姉を思うたびにはきつとこの池の竜舌蘭を思い出す。今思い出したのはこの鉢であつた。

池を隔てて池いけの間まと名のついたこの小座敷の向かい側は、台所に続く物置きいたじとみの板いた葎じとみの、その上がちよつとしゃれた中二階になつている。

あのころの田舎いなかの初節句の祝宴はたいい二日続いたもので、親類縁者はもちろん、平素はあまり往来せぬ遠縁のいとこ、はと

こまで、中にはずいぶん遠くからはるばる泊まりがけで出て来る。それから近村の小作人、出入りの職人まで寄り集まって盛んな祝いであった。近親の婦人が総出で杯盤の世話をし、酌しやくをする。その上、町から芸者を迎えて興を添えさせるのが例なので、この時も二人来ていた。これも祝いのあるうちは泊まっているので、池の向こうの中二階はこの芸者の化粧部屋けしようべやにも休憩所にもまた寝室にもなっていた。

夕方近くから夜中過ぎるまで、家じゆうただ目のまわるほど忙しく騒がしい。台所では皿鉢さらばちのふれ合う音、庖丁ほうちようの音、料理人や下女らの無作法な話し声などで一通り騒がしい上に、ねこ、犬、それから雨に降り込められて土間へ集まっている鶏までがい

つそうのにぎやかさを添える。奥の間、表座敷、玄間とも言わず、いっぱいの人で、それが一人一人にお辞儀をしてはむつかしい挨拶いさづを交換している。

その混雑の間をくぐり、お辞儀の頭の上を踏み越さぬばかりに杯盤酒肴しゅこうを座敷へはこぶ往来も見ること忙し。子供らは仲間がおおぜいできたうれしきで威勢よく駆け回る。いったい自分はそのころから陰気な性たちで、こんな騒ぎがおもしろくないから、いつものように宵よいのうちいかげんごちそうを食ってしまうと奥の蔵の間へ行って戸棚とだなから八犬伝はつけんでん、三国志さんごくしなどを引っぱり出し、おなじみの信乃しのや道節どうせつ、孔明こうめいや関羽かんうに親しむ。この室へやは女の衣装を着替える所になっていたので、四面にずらりと衣桁いこうを

並べ、衣紋竹えもんだけを掛けつらねて、派手なやら、地味なやらいろいろな着物が、虫干しの時のように並んでいる。白粉臭おしろいい、汗くさい変な香がこもった中で、自分は信乃しのが浜路はまじの幽霊と語るくだりを読んだ。夜のふけるにつれて、座敷のほうはだんだんにぎやかになる。調子を合わす三味線の音がすると、清らかな女の声であうのが手に取るように聞こえる。調子はずれの鄙歌ひなうたが一度に起こつて皿さらをたたく音もする。ひとしきり歌がやんだと思うと、不意に鞭べんせ声いしゆくしゆく 肅々とたれやらがいやな声でわめく。

信乃が腕をこまねいてうつむいている前に片手を畳につき、片袖たそでをくわえている浜路の後ろに、影のように現われた幽霊の絵を見ていた時、自分の後ろの唐紙からかみがするすとあいて、はいっ

て来た人がある。見ると年増としまのほうの芸者であつた。自分にはかまわず片すみの衣桁いこうに掛かつている着物の袂たもとをさぐつて何か帯の間へはさんでいたが、不意に自分のほうをふり向いて「あちらへいらつしやいね、坊ちゃん」と言つた。そして自分のそばへ膝ひざのふれるほどにすわつて「オオいやだ、お化け」と絵をのぞく。髪の毛の油がにおう。二人でだまつて無心にこの絵を見ていたらだれかが「清香きよかさん」とあつちのほうで呼ぶ。芸者はだまつて立つて部屋やを出て行つた。

俊ちゃんよと二人で奥の間で寝てしまつたころも、座敷のほうはまだ宵よのさまであつた。

あくる日も朝から雨であつた。昨夜の騒さわぎにひきかえて静しずかす

ぎるほど静かであつた。男は表の座敷、女どうしは奥の間へ集まつて、しめやかに話している。母上はねえさんと押し入れから子供の着物など引きちらして何か相談している。新聞を広げた上に居眠りを始めている人もある。酒のにおいのこもつた重くるしいうつとうしい空気が家の中に満ちて、だれもかれも、とんと気抜きのしたようなふうである。台所ではおりおりトン、コトンと魚の骨でも打つらしい単調な響きが静かな家じゆうにひびいて、それがまた一種の眠けをさそう。中二階のほうで、つまびきの三弦の音がして「夜の雨もしや来るかと」とつやのある低い声であらう。それもじきやんで五月雨さみだれの軒の玉水が亜鉛のとゆにむせんでいる。骨を打つ音は思い出したように台所にひびく。

昼から俊ちゃんなどと、じき隣の新宅しんたくへ遊びに行つた。内の人は皆ねえさんのほうへ手伝いに行つていたので、ただ中氣ちゆうきで手足のきかぬ祖父おじいさんと雇いばあさんがいるばかり、いつもはにぎやかな家もひっそりして、床の間の金太郎や鐘しょうき馘もさびしげに見えた。十六むさし、将棋の駒の当てつこなどしてみたが気が乗らぬ。縁側に出て見ると小庭を囲う低い土塀どべいを越して一面の青田が見える。雨は煙のようで、遠くもない八幡はちまんの森や衣笠山きぬがさやまもぼんやりにじんだ墨絵の中に、薄く萌黄もえぎをぼかした稲田には、草取る人の簑みの笠かさが黄色い点を打っている。ゆるい調子の、眠そな草取り歌が聞こえる。歌の言葉は聞き取れぬが、単調な悲しげな節で消え入るように長く引いて、一ふしが終わると、しばらく

く黙つてまたゆるやかに歌い出す、これを聞いていけるとなんだか胸をおさえられるようで急にねえさんの宅へ帰りたくなつたから一人で帰つた。帰つて見るともうそろそろ客が来始めて、例のうるさいお辞儀が始まつている。さつきから頭が重いようで、気が落ち付かぬようでも人に話しかけられるのがいやであつたから、ひとりで蔵の間へはいつて八犬伝を見たが、すぐいやになる。鯉でも見ようと思つて池の間へ行つて見た。縁側の柱へ頭をもたせてぼんやり立つ。水かさのました稲田から流れ込んだ浮き草が、ゆるやかに回りながら、水の面へ雨のしずくがかいては消し、かいては消す小さい紋といつしよに流れて行く。鯉は片すみの岩組みの陰に仲よく集まつたまま静かに鱗を動かしている。竜舌蘭

の厚いとげのある葉がぬれ色に光って立っている。中二階の池に臨んだ丸窓には、昨夜の清香のさびしい顔が見える。窓の縁に頬ほ杖おづえをついたまま、何やら物思わしそうに薄墨色の空のかなたを見つめている。こめかみに貼はった頭痛膏づつうこうにかかるおくれ毛をなでつけながら、自分のほうを向いたが、軽くうなずいて片頬かたほおで笑った。

夕方母上は、あんまり内をあけてはというので、姉上の止めるのにかかわらず帰る事になった。「お前も帰りましょうね」と聞かれた時、帰るのがなんだかなごり惜しいような気もして「ウン」と鼻の中で曖あいまい昧な返事をする。ねえさんが「この子はいいでしよう。ねえ、お前もう一晩泊まっておいで」とすすめる。これに

も「ウン」と鼻で返事する。「泊まるのはいいがねえさんに世話をかけでないよ」と言っていていよいよ一人で帰るしたくをせられる。立て場まで迎えにやった車が来たのでねえさんと門まで送って出た。車が柳の番所の辻つじを曲がって見えなくなった時急に心細くなつて、いっしよに帰ればよかつたと思う。「さあおいで」とねえさんは引つ立てるように内へはいる。

頭のぐあいがいよいよ悪くなつて心細い。母上といっしよに帰ればよかつたと心で繰り返す。けむる霧雨の田んぼ道をゆられて行く幌ほろぐるま車の後ろ影を追うような気がして、なつかしいわが家の門の柳が胸にゆらぐ。騒々しい、殺風景な酒宴になんの心残りがあつて帰りそこなつたのか。帰りたい、今からでも帰りたいと

便所の口の縁へ立ったまま南なんてん天の枝にかかっている紙のてるてる坊さんに祈るように思う。雨の日の黄たそがれ昏は知らぬまに忍び足で軒に迫ってはや灯ひともしごろのわびしい時刻になる。家の内はだんだんにぎやかになる。はしゃいだ笑声などが頭に響いてわびしさを増すばかりである。

姉上に、少し心持が悪いからと、言いにくかつたのをやつと言つて早く床を取つてもらつて寝た。萌黄もえぎじ地に肉色で大きく鶴つるの丸まるを染め抜いた更紗蒲団さらしあぶたんが今も心に残っている。頭がさえて眠られそうもない。天井につるした金銀色の蠅除け玉はえよに写つた小さい自分の寝姿を見ていると、妙に気が遠くなるようで、からだが大んだん落ちて行くようななんとも知れず心細い気がする。母上は

もううちへ帰りついて奥の仏壇の前で何かしていられるかと思うとわけもなく悲しくなる。ねえさんのうちがにぎやかなのに比べ、てわが家のさびしさが身にしむ。いろんな事を考えて夜着の領えりをかんでいると、涙が目じりからこめかみを伝うて枕まくらにしみ入る。座敷では「夜の雨」をうたうのが聞こえる。池の竜舌蘭りゅうぜつらんが目かたほおに浮かぶと、清香の顔が見えて片頬かたほおで笑う。

この夜すさまじい雷が鳴って雨雲をけ散らした。朝はすっかり晴れて強い日光が青葉を射ていた。早起きして顔を洗った自分の頭もせいせいして、勇ましい心は公園の球投げたまな、樋川ひかわの夜ぶりと駆けめぐった。

義よしちゃんちゃんは立派りっぺいに大きおほくなつたが、竜舌蘭りゅうぜつらんは今はない。
雷らいはやんだ。あすは天気てんきらしい。

(明治三十八年六月、ホトトギス)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

※「泊まるのはいいがねえさんに」は、底本では「泊まるのはいいがねえさんに」ですが、親本を参照して直しました。

入力：田辺浩昭

校正：田中敬三

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竜舌蘭

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>